

生殖補助医療が出生時体格・幼児期肥満に与える影響の性差

著者	松本 真明, 上原 絵理香, 永田 知裕, 寺下 新太郎, 山口 朋恵, 太田 知子, 吉井 啓介, 内木 康博, 堀川 玲子
雑誌名	DOHaD研究
巻	8
号	3
ページ	22-22
発行年	2019
URL	http://hdl.handle.net/10271/00003612

優秀演題候補セッション

生殖補助医療が出生時体格・幼児期肥満に与える影響の性差

松本真明¹、上原絵理香¹、永田知裕¹、寺下新太郎¹、
山口朋恵¹、太田知子¹、吉井啓介¹、内木康博¹、堀川玲子

1. 国立研究開発法人 国立成育医療研究センター 内分泌・代謝科

【背景・目的】

幼児期の肥満のリスクを明らかにすることは将来の肥満の発症を知る上で重要である。今回我々は幼児期肥満のリスクとして、年々利用者が増加している生殖補助医療(ART)に着目した。ART 出生のマウスでは成長パターンに雌雄差が存在し、雄において体重増加が大きいことが報告されている。ヒトにおいて同様の検討はなく、出生時体格・幼児期の肥満に ART が及ぼす影響を男女別に明らかにすることを本検討の目的とした。

【対象・方法】

2010 年以降に当院で出生し、研究に同意した単胎児を対象とした。在胎期間別出生時体重%ile 値が 90%ile 以上の児を HFD 児、1-6 歳の間の BMI%ile 値が一度以上 85%ile 以上となった児を Obese/overweight とした。

【結果】

男児 676 名(うち ART 出生児 155 名)、女児 650 名(うち ART 出生児 121 名)、計 1326 名に解析を実施した。HFD 児は男児では ART 出生児で 24.5%、非 ART 出生児で 10.0%($p < 0.0001$)、女児ではそれぞれ 14.9%、9.5%であった($p = 0.14$)。Obese/overweight の割合は、男児の ART 出生児で 38.7%、非 ART 出生児で 27.8%($p = 0.013$)、女児ではそれぞれ 28.1%、24.6%であった($p = 0.42$)。逆確率重み付け法による背景因子の調整を実施後、背景因子に差がないことを確認した。ART 出生児・非 ART 出生児での HFD 児の割合は男児ではそれぞれ 23.3%・10.3%(ATE 2.67、 $p = 0.0002$)、女児では 12.9%・10.1%であった(ATE 1.32、 $p = 0.46$)。Obese/Overweight は男児では ART 出生児・非 ART 出生児でそれぞれ 38.4%・28.2%(ATE 1.59、 $p = 0.036$)、女児では 30.9%・24.8%であった(ATE 1.35、 $p = 0.33$)。

【結論】

ART は HFD 児・出生後早期の肥満の割合を男児において増加させることが示唆された。